

“Liminars” の孤独

—Katherine Mansfield と 3 つの短編—

The Isolation of “Liminars” :
Katherine Mansfield and Her Three Short Stories

石 川 玲 子

1

Katherine Mansfield の作品が彼女の人生と切り離しがたく結びついていることは、ほとんどの批評家の認めるところである。K. M. Dickson は、Katherine Mansfield の批評史を概観し、1970 年代末までに、Alpers と Meyers の伝記に続いて Harkin (1983)、Fullbrook (1986)、そして Tomalin (1988) らの研究書が出版され、彼らが皆 Mansfield の人生と作品の結びつきを学問的に証明したと述べている。(K. M. Dickson 73) Dickson はまた、上述の批評家を含む多くの者が、Mansfield の作品やジャーナル、手紙の中に “the experience of exile, expatriation or isolation” を見いだしたとし、“She [Mansfield] felt herself to be an outsider, and she wrote about outsiders.” と述べている。そして Mansfield の疎外感の源を次のように説明している。

In New Zealand, Mansfield felt exiled from England by the colonial experience. In England, she felt exiled from her family in New Zealand. She also felt exiled from ordinary life by her illness, and as a woman she was an exile among male writers. (Dickson 70)

非常に明快ではあるが、Mansfield の複雑な内面をやや単純化しすぎているようにも思われる Dickson の説明に対し、Angela Smith は、この疎外感を “liminality” という概念に置き換え、Julia Kristeva の「内なる外国人 “foreigners within”」「アブジェクション “abjection”」という概念と結びつけながら、Katherine Mansfield と Virginia Woolf の間の複雑な感情の中に存在する直感的な親近感の正体を明らかにすることを試みている。“liminality” という言葉は 19 世紀後半に心理学において “the threshold of sensation” という意味で使われ始めたが、それを 20 世紀の文化人類学者 Victor Turner と Edith Turner が、さらに一つの概念として発展させた。部族社会の主要な儀式である「通過儀礼 “rite of passage”」において、儀式に参加する修練者は日常の場から切り離され、“liminars” となる。そして内外両面の変化を経て社会に再び参入する。Victor & Edith Turner は “liminal phase” にある儀礼の主体を、それ以前の状態あるいはその後に来るべき状態の属性をわずか、ないしは、全く持たない文化領域を通過するあいまいな存在と見做し、さらに “Liminars are betwixt and between. The liminal state has frequently been likened to death; to being in the womb; to invisibility, darkness, bisexuality, and wilderness.” と述べている。(Smith, *Katherine Mansfield & Virginia Woolf* 10-11) このように Turner らの議論を紹介、説明した上で、Angela Smith は Mansfield と Woolf がこうした中間的な領域にいるという意識をそれぞれ持っていることを指摘し、それが彼女達の中に親近感を呼び起こすのだと主張している。そしてその境界状態は、病が強い生と死の境界、子供がないために女性でありながら失格者であるという意識、父権社会と病が強い依存的な女性の役割と作家という職業が帯びる男性性（あるいは両性具有性）など様々な側面から論じられている。

Smith の議論は非常に説得力があり、興味深い。ただ、議論の中心が Mansfield と Woolf との間の類似性、親近性というところにおかれているために、当然のことながらそれぞれの作家の個別性に注目する場合とは違った視点からの議論になっている。例えば第 5 章 “Early Writing and Rites of Passage” は、二人が出会う前に書いた “The Wind Blows” と

The Voyage Out、さらに二人の関係が互いにもっとも影響を与え合った時期に書かれた“The Garden Party”と“Kew Gardens”を中心に扱っており、子供から大人へのイニシエーション儀礼が一つのテーマとして論じられてはいるが、主に父権社会における女性の立場と植民地における被植民者の立場との類似性、そしてその複雑な相関性が議論されている。コロニアリズムの視点が提示された非常に興味深い内容であるが、一方で章のタイトルとして“Rites of Passage”という言葉があるにも関わらず、Mansfield 自身のイニシエーションの問題は liminality との関わりの中で十分論じられているとは言えない。そこで、本論では Smith の議論を踏まえた上で、Mansfield 自身のイニシエーションと liminality の問題について考察し、その視点に立って子供から大人へのイニシエーションを扱った三つの作品の分析を試みたい。

2

Mansfield は幼い頃から、従順な姉妹達とは異なり、繊細でかつ強い自己を持っており、家庭でも学校生活においても反逆児だった。Miss Swainson's private school で学んでいた 13 歳の時、放課後に Miss Eva Butts という教師のところへ行行って、当時大人にとっても口にしにくい話題であった“free love”についての教師の考えを求めたというエピソードからも、社会の慣習に挑もうとする少女時代の Mansfield の姿が見てとれるであろう。(Alpers 19) そのような彼女は、15 歳の時生まれ故郷ニュージーランドを離れ、二人の姉と共にロンドンにある Queen's College に入学する。彼女はそこで作家になりたいという強い志を抱き、3 年間の学校生活を終えて一旦故郷に戻ったものの、その 2 年後両親の強い反対を押し切って再びロンドンの土を踏んだ。そしてその後短くも波乱万丈な人生をロンドンとヨーロッパのいくつかの保養地で過ごし、二度と故郷に戻ることはなかった。

先に引用した K. M. Dickson の指摘にもあったように、この 34 年という短い生涯において、彼女はニュージーランドでも、イギリスでも、そし

でヨーロッパの各地でも常に“an outsider”であり、“a liminar”であった。思春期の教師への反抗的な態度や、両親への反抗は、彼女自身を学校や家庭におけるはぐれ者“an outsider”にした。Miss Swainson's private school でイギリスを“Home”、ニュージーランドを“out here”と教えられた彼女は（Alpers 19）イギリスで作家としての自らの居場所を求めたが、死ぬまでイギリスを“Home”と感ずることは出来なかった。Turner の通過儀礼についての考え方を応用し、子供時代から大人へのイニシエーションが、親に保護された子供の世界からの離脱と境界状態を経て、大人の社会に新しく参入することであるとするならば、Mansfield はそのイニシエーションをうまく遂げることが出来なかったと考えられるのではないか。彼女の生涯は、少女時代に境界状態に足を踏み入れたまま、参入すべき社会を見出せずに閉じられたと考えることが出来るのではないだろうか。

思春期にニュージーランドを離れイギリスの女学校に入った Mansfield が、故郷に戻ったとき、そこでニュージーランド人としての自分のアイデンティティを見出していたならば、また事情は違っていたかもしれない。しかし彼女は故郷を嫌い、イギリスに戻って作家としての自分のアイデンティティを築くことを求めたのである。けれども、イギリスの社会、そしてイギリスの文壇は非常に排他的であった。Angela Smith は、当時影響力を持っていた芸術愛好家 Edward Marsh に宛てた Rupert Brooke の手紙と Virginia Woolf の日記を例に挙げ、その中の Mansfield に関する記述に“an unthinking imperial snobbery directed toward the ‘little colonial’”を見出している。（Smith, *Katherine Mansfield*, 1-2）“little colonial”とは Mansfield 自身が自分を指して使った言葉であり、その言葉にはイギリスの社会において彼女が抱いた疎外感、自分は「植民地出身」のよそ者であるという自虐的な思いが示されている。作家としてイギリスの社会、そして文壇に根を下ろすこと、すなわちイギリス作家としてのアイデンティティを獲得することは、彼女が思った以上に難しかったのである。

こうした疎外感、孤独感の中で、彼女は夫 J. M. Murry との関係に唯

一安らぎを求めたが、その関係もほとんど一方通行であった。自分に対する淡白でほとんど無関心ともいえる Murry の態度を責め、彼に対する自分の情熱的な愛を執拗に訴える Mansfield の Murry への手紙の数々がそのことを克明に語っている。Smith は、Mansfield が夫との間に他者の介入しない「二人だけの世界 “a world of two”」を築き上げようとしたがその夢がかなわなかったことと、Murry の “My daring, you and I are English. . . . You are a perfect flower of England.” という言葉に示されるように、彼が彼自身の “Englishness” を誇りそれを Mansfield にも押し付けようとしたことが、彼女を子供時代の世界に向かわせたのだと述べているが¹ (*Katherine Mansfield & Virginia Woolf* 81-82)、この指摘は非常に示唆的である。

イギリス人である夫との関係においても疎外感を禁じえず、孤独感に苛まれながらも、作家として生きていくことが Mansfield にとってすべてをかけた決意であり、作家として立つためには芸術の中心たるロンドンを去るべきではないと彼女は考えていた。そのような彼女がたとえニュージーランドに戻ったとしても、そこに自分の居場所を見つけることは出来なかったであろう。しかし、遠くから思いをはせる思い出の中のニュージーランドには、彼女は孤独を癒す唯一の居場所、自分の世界を見出すことができたのである²。だからこそ、彼女は幼い頃の思い出の中のニュージーランドを舞台としていくつもの作品を書き上げたのだ。書くことによって、彼女は心の中に自分の参入すべき世界を作り上げたのである。

3

Katherine Mansfield の作品の中で、子供から大人への移行期を扱った作品がいくつかある。その中に “The Wind Blows” (1915)、“The Young Girl” (1920)、“Her First Ball” (1921)、“The Voyage” (1921)、“The Garden Party” (1921)、“Honeymoon” (1922) を挙げることはほとんど議論の余地はないであろう。これらの作品は、どれも思春期、あるいはその前後の年齢の少女（娘）を主人公としている。彼女達は保護された子

供の世界から、大人の世界に足を踏み入れようとしながら、まさにその二つの世界の間際に立ち尽くしている少女達である。本論では、ニュージーランドを舞台とする四作品からもっとも論じられることの多い“The Garden Party”を除き、“The Wind Blows”、“Her First Ball”、“The Voyage”を取り上げて論じたいと思う。なお議論の都合上、論じる順序は執筆された順番どおりになってはいない。

“The Wind Blows”は、1915年10月に *Signature* 誌に“Autumn II”として発表され、その後1920年に“The Wind Blows”として *Anthe-naeum* 誌に掲載され、また同年出版された短編集 *Bliss and Other Stories* の中にも加えられたものである。この作品は、Mansfield がイギリスの軍隊に入隊するためやってきた弟と久しぶりに再会し、ニュージーランドでの幼少時代の思い出を語り合ったことがきっかけとなって執筆されたとされる。主人公の少女の名前 Matilda は Mansfield が *Signature* 誌に投稿したときのペンネーム Matilda Berry と同じであり、Matilda の弟の名 Bogey は Mansfield の弟 Leslie のニックネームでもあった。このことと、二人の家が海の近くにあつて、汽船が港を出て行く風景で物語が閉じられるところからも、この作品の舞台はニュージーランドであり、主人公の姿には少女時代の作者が重ねられていることは明らかである。

この作品には、激しい風の音で目覚めてからその日の夕刻までの、Matilda の心の揺れと彼女の目から見た外界が、すべて現在時制によって描かれている。弟の Bogey が声変わりの最中であり、姉弟の容姿がそっくりであることから、二人の年齢が近く、共に思春期であることがわかる。一日中激しく吹き荒れる風は、Matilda の思春期の複雑な、揺れる心を象徴している。秋のある朝、家がたがた揺れ、彼女のベッドまで揺れている。木の葉や新聞が窓の外、通りの上で舞い、野菜の籠をつけた天秤棒を担ぐ中国人がよろけるように歩き、三本足の犬が走り去る。彼女の目に映るこれらのものは、心の中のバランスを失い、やり場のない苛立ちや動揺を覚える思春期の少女の心象風景でもある。髪の毛を編む手が震え、鏡を見る勇気のない彼女の姿もまた、アイデンティティが危うくなり、あるがままの自己を受け止めることのできない思春期の少女の心理を表してい

る。さらに、菊の花を暴風から守るために摘もうと隣の庭に出てきた同年代の Marie Swainson が、スカートのすそを何度押さえても激しく捲り上げる風のために取り乱して、せっかく摘んだ花を踏みつける様子が Matilda の目を通して描写されるとき、Angela Smith は鋭くそこに「性的な不安感 “a sense of sexual anxiety”」を読み取っている。(K. Mansfield & V. Woolf 123) ピアノのレッスンの場面で、Mr Bullen が Matilda の前にレッスンを受けている少女の肩の上から腕を伸ばして鍵盤をたたいている時、少女が顔を赤らめているのを見て、「馬鹿な子 “The stupid.”」 「なんておかしいこと！」と心の中でつぶやきながら、一方自分のレッスンの番になると理由なく涙ぐんで、彼女の手を取った Mr Bullen の肩に頭を軽くもたれかからせるという Matilda の行為にも、思春期の不安定な精神状態と、異性あるいは性に対する憧れと嫌悪との入り混じった複雑な思いが示されている。

上で Matilda の心象風景を構成する要素の一つとして見た「中国人」は、彼女の不安定な精神状態を表すだけでなく、Angela Smith が liminality と結び付けた Kristeva の “foreigners within” を象徴するものと見ることも出来よう。外国人、あるいは他者との出会いによって、自己と他者との境界線が揺すぶられ、抑圧されていたものが表面化し、「内なる外国人 “foreigners within”」として認識される。ニュージーランドの北島をひと月間旅した 19 歳の Mansfield が植民地生活の中で抑圧されてきたニュージーランドの過去の歴史を知り、マウイ族の生活に触れたとき、自らの中に彼女が発見したのが「内なる外国人」であったと Smith は指摘している。Mansfield が自分のことを “I am alone — I am hidden” と言うとき (The Urewera Notebook 84)、彼女は自分の中にある秘密の自己、「内なる外国人」の存在を認識したのだ。(K. Mansfield & V. Woolf 117-119) Mansfield と同様、“The Wind Blows” の Matilda も自分の中にこれまでの自分とはなじまない「秘密の自己」を内に抱え持っているのだ。その自己は彼女を周囲から孤立させる。風について愚痴をこぼす母と祖母の話し声や「玄関を開け放たないで」と叫ぶ誰かの声、母に電話を取り次ぐ弟の声、このような激しい風のせいどこか騒然とした雰囲気

家から逃げ出すように、彼女はピアノのレッスンを受けに **Mr Bullen** の家へ向かうのだ。「人生はなんて嫌なものなんだろう」とつぶやき、戻りなさいという母の呼びかけにも応じずに “Go to hell” と叫んで彼女は出かけるのである³。

外の風の激しさとはうって変わり、**Mr. Bullen** の居間は「洞窟 “cave”」のように静寂で充たされている。菊の花の香り、「孤独」というタイトルの絵、かび臭いにおいによって、どこか生気の失われた隠遁所をイメージさせるが⁴、**Matilda** はその部屋でその日初めて心の安らぎを覚えている。**Angela Smith** が *liminars* すなわち境界状態にある者は互いに激しい同朋意識を抱きがちであるという **Turner** の言葉を引いて、**Mansfield** と **Woolf** が互いに抱いた親近性に結び付けているが (**K. Mansfield & V. Woolf** 13)、**Matilda** が **Mr Bullen** に対して覚える安心感も同様に説明できるかもしれない。**Turner** によると *liminality* はしばしば死、子宮にたとえられるという。とすれば、この洞窟のような、生気の失せた雰囲気の間を *liminal place* と見なすことも出来るだろう。**Mr Bullen** も恐らく社会に参加することを拒み、音楽の世界に自己を隠滅させる孤独な *liminar* なのであり、自分の居場所を失い疎外感、孤独感を覚える **Matilda** は彼の中に自分との同質性を見出しているのだろう。

多くの批評家が指摘するように、再び家に戻った **Matilda** を散歩に誘う弟 **Bogey** は、彼女の *double* として描かれていると考えることが出来る。そのことは、彼らが同じ輝く目と熱い唇を持ち、寄り添って「町を一心に歩く一人の人間のよう “like one eager person through the town”」であることに暗示されている。自分を制御しかねる **Matilda** と比較的冷静な **Bogey** は対照的で、**Matilda** の中の二面性を表している。**Bogey** の存在によってバランスをある程度取り戻した彼女はその日初めて鏡を直視することができるのである。

彼らが風に立ち向かって遊歩道を歩き、防波堤に打ち寄せる波のしぶきを浴びるとき、風と海は一体となって彼らがこれから対峙しなければいけない人生あるいは大人の世界を象徴している。彼らはそれに向かって突き進んでいくが、足取りは遅く、不安定である。家を出る前に **Matilda** が

鏡に向かって「お前たち、わたしたちすぐかえってくるからね。」呼びかけるとき、今大人の世界に向かおうとしている彼女の心が半ば引き裂かれていることを示している。子供の世界に完全に別れを告げる勇気を、彼女はまだ持たないのである。

陸から海（汽船）へ、海から再び陸へと視点が変化する最後の場面は非常に暗示的である。視点の移動と同時に、時間も最初の語りの時点からその数年後、そして再び最初の語りの時点へと移動する。まず“**Look, Bogey, Look over there.**”という **Matilda** の言葉に続いて、とがった岩と岩の間の出口を抜けて、風をものともせず海へと突き進んでいく汽船が描き出される。“**They are on board leaning over the rail arm in arm.**”という文とそれに続く「あれは誰?」「姉と弟。」というやり取りは、陸地から汽船の甲板にいる二人づれの姿を捉えたものと思われるが、次の“**Look, Bogey, there's the town.**”と始まる **Matilda** の言葉は明らかに船の上から陸地を見やって発せられたものである。しかも何年も時を隔てた未来へとシフトしている。そのことは、**Matilda** が今遠ざかろうとする生まれ故郷を感慨を持って眺め、何年も前に風の日に二人で散歩をしたことを覚えているかと **Bogey** に尋ねるとき、明らかになる。「さようなら、小さな島」と **Matilda** は呼びかける。しかし次に暗闇が海面を覆い、「もうその二人は見えない。“**They can't see those two any more.**”」「さようなら、さようなら、忘れないでね。」という言葉の後に、“**... But the ship is gone now.**”という一文が続いたとき、視点の位置は再び陸に、そして現在に戻っているのである。こうして陸から海を見た視点と、海から陸を見やる視点という二つの視点が提示され、しかもそれぞれが遠く隔たった二つの時空を形成している。論理的にはそれらは決して重なり合うはずがないにもかかわらずこの最後の場面で、その両者が微妙にあいまいに溶け合うように交差している。

ここで汽船に乗って海に出ることが、大人への旅立ちを意味していることは明らかである。今船が出て行こうとしている岩の出口の向こうには大海原、すなわち大きな世界が広がっているはずである。ところが汽船の上の二人はその未来の世界に背を向けて、手すりに寄りかかり、自分達が後

にしてきた世界を見つめている。小さな島に「さようなら」と別れを告げてはいるが、少なくともこの短編の中に未来を志向する言葉、あるいは思いは全く提示されてはいない。一方陸地の二人が見送る船は最後に「行ってしまった」が、その船が向かって行った先に彼らの思いが向けられることはない。“The ship is gone.”という表現には、船が視界から消え去りただ波打つ海原が広がる光景が暗示されている。そして“The wind — the wind.”という一文とともに終わる結末は、汽船の出航の描写が何かの始まりを期待させたのに対して、再び耐えがたい風の中へと引き戻された失望感と、癒しがたい喪失感を残す。これからも Matilda は不安定な境界状態にとどまるであろうことが暗示され、読者は汽船に乗った二人の姿は幻だったのかもしれないという思いに囚われる。そこから踏み出すべき新しい大人の世界への道は示されないままなのである。このように見ると、船で漕ぎ出したものの安住の地を見つけられず、境界領域 (liminal sphere) を漂い続けながら失われた幼年時代の思い出の中に心の安らぎを求めた作者の姿が“The Wind Blows”に投影されていることにわれわれは気づくのである。

4

“The Voyage”の舞台は、“The Wind Blows”と同じくニュージーランドに置かれている。しかし、“The Wind Blows”がある日の朝から夕刻までを描き、汽船が出航したその先を描いていないのに対し、“The Voyage”では、夜から次の朝にかけて、主人公 Fenella の船旅と目的地到着の様子が描かれている。母を亡くした Fenella は父の元を離れ、迎えに来た祖母と共にニュージーランドの南島の港から海を隔てた北島まで一晩の船旅を経験し、祖父母の家までたどり着くのである。港で足早に歩く父と祖母に遅れずついていくために Fenella は「時々格好悪く飛びはねなければならなかった」といった表現 (470) や「私、向こうにどのくらいいるの?」と父に尋ねる様子 (471) から、Fenella は Matilda よりも年下であろうと思われる。港に残った父の姿を甲板から必死に探す

Fenella を乗せて、船が沖に向かって進んでいく場面が象徴するように、彼女は両親に守られた子供時代に心を残しながら、大きな運命の力によって、他の子供よりも早く子供時代から引き離されたのである。**Fenella** が船に乗り込むときに水夫が差し出してくれた「乾いた硬い手」(470) もそのことを暗示している。母親の柔らかな暖かい手に守られた彼女の幼年時代は終わりを告げたのである。甲板の上の **Fenella** が気づいた「高いところで、両手を短い上着のポケットに突っ込み、海を見つめて立っている小さな人影」は彼女の孤独を、そしてその直後の「船がかすかに揺れ、星もゆれていると彼女は思った。」という表現は彼女の心の不安を暗示している。(472)

Fenella にとってこの船旅は子供時代からの離脱の第一歩を意味するだろう。船旅の間 **Fenella** は目と耳をじっと凝らして大人の世界を観察している。社交室のむっとする空気ときらびやかさ、あるいは彼女が寝台の中で聞いた室内係りの給仕と祖母の間の母の死についてのやりとりは、彼女が垣間見た大人の世界を象徴している。母の死について祖母が言った “It was God’s will” という言葉は、人生の荒波を乗り越えてきた者のみが持つ諦観を示している。このような大人達の世界が **Fenella** の視線を通して描き出されるとき、その視線が主観に色付けされていない無色透明なものであるがゆえに一層、大人の世界を外から見る傍観者としての **Fenella** の立場が強調される。彼女の目に映る祖母の姿はおおらかな明るさを感じさせるが、祖母と **Fenella** の間には見るものと見られるものと間の埋めがたい距離が感じられる。

一晩明けた早朝、**Fenella** が「まるで何週間も一緒に旅をしてきたかのように、驚いて『陸よ、おばあちゃん。』と言い」、心の中で “Oh, it had all been so sad lately. Was it going to change?” と考えるとき (475)、そこには不安感の中にのぞく新しい変化への期待が感じられる。また、その後たどり着いた祖父母の家の醸し出す日常性、そしてベッドに入ったまま **Fenella** と対面する祖父の暖かい雰囲気、彼女の人生の新しい始まりを感じさせる。実際多くの批評家はこの作品に希望的な結末を見出している。例えば **Hanson & Gurr** はこの作品の結末に父親の “the oppressive

tension” から祖母の “reassuring calm” への転換を見 (Hanson & Gurr 98)、K. M. Dickson は船を “a symbol of triumph over darkness and death” と捉えている (Dickson 63)。

しかしながら Pamela Dunbar が、Fenella が母の死という損失を補償するべき “the Homes of Homes” にたどり着いたと見えながら、そのような暗示を祖父のベッドの上の格言が覆がえしていると主張する (Dunbar 172-73) ように、作品の結末の表面的な明るさと対照的な人生に対する暗い認識がこの作品にも流れている。Fenella が甲板の上でこれからの生活を思いながら遠く陸地を見やる場面で、夜明け前の氷のように冷たい空気、同じように「冷たく青白い」空と海、遠くの「骸骨のように見える銀色の枯れた見知らぬ木々」そして「憂鬱そうに」歩く人々の姿が描出され、彼女の未来に影を落している。また祖父母の家の戸口に置かれた長靴とじょうろは老夫婦の平和で平凡な日常生活を象徴し、Fenella がそこでは外来者であることを暗示している。さらに祖母が祖父と話している間、一人薄暗い居間に待たされている Fenella の姿も、穏やかな日常から疎外された彼女の立場を象徴している。Fenella が猫の「白い暖かい毛」の中に冷たい手をうずめて、部屋の向こうから聞こえる祖父母の話し声に耳を傾けると、今後彼女が、温かい家庭のぬくもりのなかで憩いながらも、味わうであろうある種の疎外感、孤独感が、暗示されていることにわれわれは気づく。この家で彼女は、家族の一員でありまた一員でないという、猫と同様の立場にあり続けるだろう。そして祖父のベッドの上の額の中の言葉 “Lost! One Golden Hour/ Set with Sixty Diamond Minutes/ No Reward Is Offered/ For It Is GONE FOR EVER!” は、祖父の暖かな雰囲気とは裏腹に、Fenella の黄金の幼年時代が終わったこと、そしてそれに代わるものは与えられないということを、厳然と告げている。Fenella にとって祖父母の家は、母の懷に包まれた幼年時代の世界に取って代わる安住の地ではないのである。

では Fenella に取っての安住の地は、どこにあるのか。その答えは、祖母の名前が Mrs Crane であり、Fenella の背中にくくりつけられた祖母の傘の白鳥形の柄が、彼女の肩をせかすようにコツコツつづいていたこ

と⁵、そして鶴も白鳥も季節ごとに遠地へと飛び立ち、ひとつの土地に定住しない渡り鳥であるということのなかにありそうに思われる。つまり、作品の最後に **Fenella** が祖父のベッドの柵に傘の柄をかけるとき、それはひとたび旅を終えて安らごうとする彼女の現在の状況を象徴するが、その傘はまた同時に、いつか彼女が祖父母のもとを離れるとき、彼女がどこにも安住することなく旅を続ける運命にあることをも予示しているのである。それは、あたかもマンスフィールドが自分自身の運命を、一步離れた地点から半ば皮肉な思いも込めてそこに描こうとしたかのようなのである。

5

“**Her First Ball**” は、**Mansfield** がニュージーランドを舞台にした作品の中の **Sheridan** 家を描いた作品群の一つである。主人公の **Leila** は “**The Garden Party**” の主人公 **Laura** の従姉にあたり、“**Her First Ball**” においても **Sheridan** 家の子供たちは **Leila** と舞踏会に同行するという立場で登場している。“**Her First Ball**” の主人公 **Leila** は 18 歳である。田舎住まいでこれまで舞踏会に出る機会のなかった彼女にとって、初めての舞踏会は彼女がこれまで足を踏み入れたことのなかった大人の世界を象徴している。ただしそれは “**The Voyage**” で **Fenella** がのぞいた社交室に似て、子供の世界にはないきらびやかさをもった大人の世界の一面を表しているに過ぎない。一方彼女に踊りを申し込んだ年配の男が、きらびやかな世界の背後に潜む陰鬱な現実の断片を彼女に提示する役割を担っているのである。

作品の中で、子供の世界と大人の世界は対照的な形で提示されている。田舎の静かな夜と、にぎやかできらびやかな舞踏会の夜。女の子同士で踊った寄宿学校での厳しいダンスのレッスンと心踊る華やかな舞踏会。「埃っぽいホール “**dusky-smelling hall**”」で「おびえた様子の小柄な女性 “**the poor terrified little woman**”」が「冷たいピアノ “**the cold piano**”」をたたき、**Miss Eccel** が少女達の足を長い杖でつつくというレッスンの思い出は、ダンスの楽しさや華やかさとはおよそかけ離れたもので

あり、大人の監視下に置かれた閉塞的な子供時代を象徴している。(428) それに対して、その夜の輝く床、ピンクと白のアザレアの花、陽気な音楽の中で繰り広げられる舞踏会の華やかさは全く対照的である。しかし、子供時代は平和で静かな守られた世界でもある。着替えの最中に、舞踏会を断ってほしいと母に頼み、「奥まった田舎の家のベランダで月の光りの中『ホーホー』とふくろうの子が鳴くのを聞いていたいという烈しい望み」を抱いた Leila は、大人の世界への恐れと不安、母親に守られた安全な子供の世界への未練を示している。しかし、その気持ちは華やいだ雰囲気の中のホールに足を踏み入れた瞬間に、「一人では耐え難いほどの快い烈しい喜び」に変わる。(428)「彼女は夜がこんな風だとは知らなかった。これまで夜は暗くて静かで、美しく、時に物悲しいものだった。厳粛なものだった。だが、二度とそんな風には感じないだろう。夜は燦然として開いたのである。」(429-30)

このように、自由で華やかな大人の世界に足を踏み入れた喜びを全身で受け止めていた Leila の心に、暗い影を投げかけるのが太った年配の男である。小太りで、頭は丸くはげている。チョッキはしわが寄っていて、手袋のボタンが一つ取れ、上着は薄汚れている。Leila の目には彼は「舞台の上で、母親や父親達の中に座っているべき」人であるに見えるにもかかわらず、彼はまだ若い男女に混じって、「30 年も」舞踏会で踊り続けているのである。(430) 彼の存在は、Leila の若さ、弾む心、舞踏会の華やいだ雰囲気といったものに全くそぐわないものである。彼の外見は、老いの醜さと哀れさを物語っている。男が二度目に現れたとき、Leila が「男がとても年を取っているのを見てまたショックをうけた」のは、まさにそのことを彼女が直感的に感じ取ったからであろう。

しかしこの全く対照的な Leila と男は、相互に干渉し合うという意味において、不思議な二重奏を奏でている。Leila の若い初々しさが男に過ぎ去りし若さと来たる老いへの感傷を引き起こす一方で、男の老いてみすばらしい姿と若さの移ろいやすさを語る言葉は Leila の心に「老い」という現実を突きつけて若さの絶頂にある彼女の新鮮な喜びに大きな影を落とすのである。

男は Leila の初々しさに自分の昔を重ね、時の移ろいを顧みている。Leila のプログラムにパートナーとしての自分の名前を書き込むと、男は彼女の顔をちらと見て “Do I remember this bright little face?” “Is it known to me of yore?” とつぶやく。(428) このとき、おそらく彼は 30 年の時をさかのぼり、初めて舞踏会のホールに立ったときの新鮮なときめきと相手の娘の初々しい顔を、Leila の輝く上気した顔のなかに見出したのであろう。だからこそ、ホールの床か他家の舞踏会しか話題のない若いパートナー達が Leila の初めての舞踏会の喜びを全く理解しなかったのに対して、男はこれが彼女にとって初めての舞踏会であることを言い当てるのである。なぜわかったのかと驚く Leila に対し “Ah,” “that’s what it is to be old!” と答える男の言葉は、若さの移ろいやすさを語るその後の言葉とあわせて見たとき、大仰な自己卑下をこめて語られたであろうことが察せられる。Leila に対し、若さは長く続かないこと、すぐに老いがやってきて彼女の若々しい容姿もすっかり変わり果てるだろうことを、男が情感たっぷりに語るとき、その言葉は若き日の男自身に向けられたものであるように思われてくる。このような男の心の動きに気づいたとき、若さを失いながら、舞台の上で跳めている同年代の親達の仲間入りをする代わりに、相変わらず若者の中で異質な存在として踊り続けている男の孤独感をもわれわれは見出すのである。

一方子供の世界と大人の世界の狭間で大きく揺れ動く Leila の心は、男が突きつけた「老い」という現実によって大きな衝撃を受け、再び子供の世界へと大きく揺れる。男の腕から逃れて壁際に立つ Leila の「心の深いところでは、小さな少女が頭からエプロンをかぶり、すすり泣いていた」のである。しかし次のパートナーと踊り始めると、彼女は再び華やかな雰囲気の中に呑み込まれていく。先ほどの男とぶつかっても「彼女は彼に心を留めることもなかった。“she didn’t ever recognized him again.”」(431) Leila の心はまた大人の世界へと大きく揺れ戻ったのである。彼女にとって、大人の世界の厳しい現実はまだ実感を伴っていない。彼女はまだ二つの世界の境界で揺れているのだ。

ここで、Mansfield に目を向けると、Leila と男との二つの意識はどち

らも彼女自身の内面を反映しているように思われる。子供の世界と大人の世界の間で揺れながら大人の世界に一步踏み出した Leila は若き日の Mansfield であり、一方若さへの郷愁と老いの悲哀を心に抱きつつ周囲から孤立した男は、まだ 30 代ではありながら病のために常に死を意識し、孤独感を募らせて幼年時代のニュージーランドに思いをはせた Mansfield に重ねられるのである。確かに女性としての Mansfield の思いを男の登場人物に重ねることには一見違和感があるように思われるが、「書く」あるいは「語る」という行為自体が父権社会に与することであるとすれば納得がいく。実際、若さを失った Leila の未来の姿をリアルに描き出すこの男の芝居がかった語りぶりは、まさにストーリーテラーのものである。それはまた、Mansfield が「生まれつきの演技好きであ」ったことをも思い起こさせるであろう。(三神 79)

6

以上、Mansfield が思春期に故郷ニュージーランドを離れ、作家を目指してイギリスに移ったもののその後どこにも自分の居場所を見つけられなかったこと、そしてその孤独を癒すために、思い出の中、そしてニュージーランドを舞台とした作品を書くという行為の中に逃避したことを確認し、イニシエーションを扱った三作品を分析した。そして、それぞれの作品の根底には二つの世界の狭間で揺れ動く心、孤独な liminars の思いが様々な形で秘められていることを論じた。“The Wind Blows”は、Virginia Woolf や Lytton Strachey、Bertrand Russell をはじめ多くの人が賞賛した作品であり、Mansfield も気に入っていた作品である。それだけに、非常に深みがあり、特に二つの時空を微妙に重ね合わせたあいまいな結末が重層的な意味をかもし出している。その結末が新たな世界への入り口を示すかに見えて、結局何も示されず、不安定な中間領域 (liminality) に取り残されるヒロインを描いたものであると読むことで、そこに幼年時代のニュージーランドを後ににしたものの、どこにも安住の地を見つけられずに liminality にとどまり続けた Mansfield の孤独感、疎外感を見出し

た。次に“The Voyage”を取り上げ、これまでヒロイン Fenella のイニシエーションが無事に成し遂げられたとして論じられることの多かった結末に、Fenella のイニシエーションがまだ途上であり、それが永遠に遂げられないかもしれないという暗示を読み取った。そこにはやはりどこにも参入すべき場所を見つけれなかった彼女の苦々しい思いが潜んでいると考えることが出来るのではないか。祖父母の家にあるときも、またそこを出た後も、Fenella の心の奥に潜み続けるであろう孤独感は、liminar としての Mansfield の孤独感と同種のものであろう。最後の“Her First Ball”においては、子供と大人の世界の狭間に立つうら若い Leila と若い踊り手たちの中で異質な年配の男との対比によって、Mansfield の二つの思いが示されているものと解釈した。子供と大人の世界の間で揺れていた若き日の思い出が Leila の揺れる心に表され、そのような初々しい時期を過ぎてなお、liminar としての孤独、疎外感に甘んじ、唯一幼年時代の思い出の中に安らぎを求めるしかない Mansfield の思いが、孤独な男の思いに重なるのである。

こうした作品の中に見出せる様々な感情、人生への思いは、Mansfield が意識的に埋め込んだかという、そうではないかもしれない。それは恐らく、もっと無意識の部分で、作品の中に込められるものなのかもしれない。しかし、彼女の liminar としての思いを念頭に置いた上で作品を読んでもみると、それまで見えなかった意味が新たに現れ、そこに込められた無意識の思いも見えてくるのである。

注

- 1 Smith は、1918 年に Murry が Mansfield に宛てた手紙の中の言葉“My daring, you and I are English, and because we are truly English we are set apart from our generation . . . You are a perfect flower of England”を引用している。(Katherine Mansfield & Virginia Woolf 82) Cf. Turnbull Archive, letter of 30 May. 1918.
- 2 Mansfield が、1915 年イギリス軍隊を志願してきた弟 Leslie と再会し、ニュージーランドでの子供時代について懐かしく語り合ったこと、そしてその弟を出征先のフランスで演習中の事故によって亡くし、それをきっかけに故郷ニュージーランドを舞台とした作品を書き始めたこと

は良く知られている。

- 3 Smith はピアノが多くの植民地作家の作品の中で描かれており、西洋文化、そして家父長制社会の象徴として読むことが出来ることを指摘している。(K. Mansfield & V. Woolf 111-145.)
- 4 Clare Hanson and Andrew Gurr はこの部屋と Mr. Bullen のかもしれ出す雰囲気には “deadening air” が感じられると指摘している。(Clare Hanson and Andrew Gurr 46)
- 5 この作品の「鳥」の持つ含意については、Dunbar と Smith が言及している。(Dunbar 172, Katherine Mansfield 144)

引用文献

- Alpers, Antony. *The Life of Katherine Mansfield*. Oxford: Oxford University Press, 1982.
- Dickson, Katherine Murphy. *Katherine Mansfield's New Zealand Stories*. New York: University Press of America, Inc., 1998.
- Dunbar, Pamela. *Radical Mansfield: Double Discourse in Katherine Mansfield's Short Stories*. London: The Macmillan Press Ltd, 1997.
- Hanson, Clare and Andrew Gurr. *Katherine Mansfield*. London: The Macmillan Press Ltd., 1981.
- Mansfield, Katherine. “Her First Ball.” *The Stories of Katherine Mansfield*. Ed. Antony Alpers. Oxford: Oxford University Press, 1984. 426-431
- . “The Voyage.” *The Stories of Katherine Mansfield*. Ed. Antony Alpers. Oxford: Oxford University Press, 1984. 470-477
- . “The Wind Blows.” *The Stories of Katherine Mansfield*. Ed. Antony Alpers. Oxford: Oxford University Press, 1984. 191-194
- Smith, Angela. *Katherine Mansfield*. Hampshire: Palgrave, 2000.
- . *Katherine Mansfield & Virginia Woolf: A Public of Two*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- 三神和子『キャサリン・マンスフィールド——世紀末、モダニズム、芸術家』辞游社、2000年。